

## 「税」に対する新たな視点

北鎌倉女子学園中学校3年 川西 カンナ

日々の生活の中で、税と聞くと、ネガティブなイメージが先行してしまうように感じる。私自身、税を意識するのは買い物をするときくらいだ。この夏、そんな印象をガラッと変える出来事があった。

夏休み、私はかまくら子ども議会に議員として参加した。普段ニュースで一部を見るだけの私にとって、実際に議員になるということは、とても刺激的な体験となった。議会を通して、疑問に思ったことが二つある。

まず一つ目は、議会の運営にかかる費用や、市が実際に行っている環境保全や観光振興などのさまざまな活動の費用がどのように賄われているのかということだ。鎌倉市の令和四年度の歳入・歳出決算額の内訳によると、歳入の約八割強が市民税や自動車税などの税金であった。また歳出では、議会の運営費や私たちの学びを支える教育費に一割、福祉や子育て支援にあたる民生費が約四割を占めていた。このことから、市が行うさまざまな活動が税金によって支えられていることを実感し、改めて、私たちの生活に必要な不可欠であり、私が普段意識していないところで、税の恩恵を受けていることに気づかされた。

二つ目は、市長さんや教育長さんが、答弁の際に「します」という言葉を使わなかったこと。「しようと考えています」や「する方向で検討しています」などの表現は使うのに、決して「します」と断言をしなかった。それは、税が貴重な財源であること、社会的な変化や予期せぬ事態に柔軟に対応するため、議会で議論を重ね、慎重に見極める必要があるから、その場での断言を避けたのだと考えた。

そもそも税とは、国民の「健康で豊かな生活」を支え、実現するために、国や地方公共団体が行う活動の財源となるもので、その費用を国民一人一人が出し合って公平に負担しているもの。日本には約五十種の税があり、一つの税のみでは実現できない公平を、課税方法の異なるいくつもの税金を組み合わせることで、公平に負担できるようにしている。また、「富の再分配」とも呼ばれ、国民の経済格差を埋めるための仕組みである所得再分配をすることにより、納めた税金の額に関わらず、誰でも国や地方公共団体から、公平にサービスを受取ることができるようになっている。これらの公平のルールを決めているのは私たちの代表であり、税の使い方を決めているのも私たちの代表である。

将来、自分が公平のルールや税の使い方を決める立場になった時、あるいはその代表を選ぶ時に、適正な判断ができるよう、今のうちから社会のしくみや税について、日々意識して生活しなければならないと強く感じた。そして、情報社会の中で、必要且つ正しい情報を取捨選択し、日頃からニュースを見聞きするだけでなく、新聞や、市区町村の広報誌を自主的に読んでいきたい。